

『サッカーの先輩・後輩は死ぬまでやな……』

～六甲サッカー部・創部メンバーインタビュー～

あの佃先生に直角おじぎをさせるこの人達こそ……

神戸を一望に見渡せるホテルの最上階にあるレストランにその面々が姿を現し始めたのは、秋も深まった10月下旬の夜のこと。

何を隠そうこの方々が、我々の青春の思い出を山ほど築いてくれた“六甲サッカー部”そのものを作り、あの佃先生をして直角のおじぎをさせてしまう7期の創部メンバーの先輩方なのである。

電車の中や街で出会ったら“ああ、ただのおっさんか”と通りすぎてしまうであろうような年代の方々ではあるが、その第一印象はそれぞれの方が、



六甲サッカー部の栄えある初代主将・水谷先輩。

個性豊かで、パワフルでそして“まだまだこれから……”という鋭い眼をされていたこと。

さすがは、我々の大先輩である。

そもそもこの会が催されたのも、こ

の六甲サッカー部50年史を作るにあたり、その歴史の第一歩を築いて下さった創部メンバーの方に、その苦労話やその当時の社会の話聞いてみたいという佃先生も含めた後輩からのわがままを快く聞き入れて下さったものであり、この日も東京や広島からわざわざ



当時のエースストライカー・谷田先輩。

出向いて下さったおかげで、この企画が日の目をみることになったものである。

ともあれやや緊張した面持ちで円卓に向かいあった我々だが、5分もしないうちに自然と話は50年の時を飛び越えて、当時の話へとタイムスリップしていくのであった。

サッカー部のルーツは園芸部？

“えっ、みなさんはお花を育てていた人達だったの”と早合点してちょっと腰の引けた私であったが、先輩達の

話を良く聞くとどうも以下のような成り立ちであったらしい。

今の学校とは少し様子は違うが、当時もグラウンドは3つにわかれており、2段目はなんと芋畑であったらしい。まだ食料事情のよくない時代に園芸部がここで作った芋を食べ盛りの生徒達に分けあっていたということ。

しかし、作っている園芸部が人より多くの芋を着服していることに腹を立てた有志がその畑をつぶして整地し、作ったのがサッカー部であるらしい。

“えっ、そんなばかげた理由でできた部なの”とまたまた引いてしまいそうになったが、まあこれは先輩が楽しいエピソードとして話して下さったものであり、新しいグラウンドができるのを契機に、何か新しいエネルギーを



今も元気一杯の安田先輩。

注げるものをと考えた7人の先輩によって我々の歴史の第1章は始まったということである。

しかし、今や六甲の第2サッカー部と呼ばれて久しい生物部が、こころに



クールな知性派の小椋先輩。競歩大会では常に驚異的なタイムでトップを飾っていた。

くいままでのプレーを見せるのも、このサッカー部のルーツとどこか関わりがあるなと閃くのは、私一人ではあるまい。

当時の花形は山岳部と体操部、野球部。

さてここのその誕生を見たサッカー部ではあるが、最初から順調というわけではない。今の時代からは想像もつかないような話をいくつか聞かせて頂いた。

まず、ゴールやボール、ユニフォームなどが全然ない。道具が何もなく、芋畑だけを見てよく「サッカー部を作ろう」なんて考えつくものだと、今の我々は感心させられるが、とにかく材木屋さんの協力で、ゴールができ、学校から与えられたボールを毎晩自分たちで繕い、ストックングだけをそろえてやっと形が整った。

次に、なんと創部メンバーの中に、ちゃんとしたサッカーのルールを知る者が一人もおらず、そのルールを大倉山の図書館まで調べに行ったそう。

のどかというのかあきれるというのか、でもまあよくよく考えると、“パイオニア”というものはそういうものかもしれないなとも思える。

ところで肝心の11人のメンバーだが、当時運動能力の高いエリート達は、山岳部や体操部、野球部、バスケット部にはいており、試合の時などは、それらの部から何とかメンバーを借りて行っていたようだ。

これは、あくまでも私の個人的な想像であるが、山岳部というのは、すなわち真の山男であって、今のうすっぺ



長身のゴールキーパー宮原先輩。

らいアウトドア野郎とは一線を画す、屈強な硬派集団であったにちがいない。体操部もまたしかりであったはず。

こういう勉強もスポーツもエリートで、硬派という花型クラブの人達からは、“おまえら、ボールコロコロ転が



我々を心から楽しませてくれる藤岡先輩。今も六甲に住み後輩達を温かく見守っている。

して何チャ〜ラチャ〜ラやっとなねん、このドロガメ！”的な迫害があったにちがいない。しかし、その山岳部や体操部が今や姿を消し、“ドロガメ”などと呼ばれていたことはあり得ないが、7人のメンバーの方に苦勞をしながら作っていただいたサッカー部が、50年を経た今も繁栄を続けているのも、この7期の『7人の侍』の熱意のタマモノであるとしか言いようがなく、今さらながら後輩の我々はその熱意に感心させられる次第である。

戦禍をくぐってきたわがサッカー部。

さて、この六甲学院サッカー部が誕生した時代について、少しふれてみたい。7期の方々が生学していた時代はちょうど太平洋戦争と重なる時代なのである。学校の東100メートルぐらいを今も流れている川では、戦争でなく

なった人の死体を焼いていた話であるとか、前述したいも畑の話、食用にうさぎを飼っていた話など、戦争を知らない我々も身につまされるような話をいくつか聞かせていただいた。

そんな時代に、わずかなサッカーの知識と大いなる熱意でサッカー部を誕生させ、今日まで見守って下さった7期の大先輩に、我々は本当に敬意を表すものである。



さすがの佃先生も……

発足当初のわが部の戦績はというと、輝けるその最初の試合は、3対2で伊丹高校を下したということ。

その後は、なかなか勝てないことが多く、まがりなりにもサッカーの名門校と呼ばれる時代までには、もう少し時間がかかったようである。

それにしても、この頃、われらが佃先生はなんと六甲の中一。ドク博士がタイムマシンを貸してくれるなら、この時代に真っ先に行って、「目嚙んで死ね」などとどなってみたいような、こわいような。

しかし、“鬼の佃”もこの頃はまだまだかわいい紅顔の少年であったはずである。そして、我が六甲のサッカー部最大の恩師とすべき人が、もうこの時代から登場するのである。

我々にすべてを捧げて長峰の丘に眠るヒルケルさん。

エーリヒ・ヒルケル氏、30才。1940年3月に六甲中学に着任。今も六甲サッカー部のOBチーム六甲ヒルケルクラブに名を残すその人である。

ヒルケルさんについては、この本の別ページで、多くの思い出についてご紹介したいと思うが、六甲という学校、いやひょっとすると六甲のサッカー部に、そのすべてを捧げて下さったと言っても過言ではない。

このドイツ人神父は、何とこの創部



当日はケガのため、残念ながらご出席いただけなかった土井先輩。

の時から、サッカー部を陰ながら支えてきて下さっていたのである。この本の第一冊目はその命の火が燃え尽きるまで、六甲のサッカー部に目をかけて下さったヒルケルさんのもとへ届けようと考えている。

歴史は歴史。これからはこれから。

もちろんヒルケルさんだけでなく、サッカー部を助けて下さった先生は、たくさんいらっしゃると思う。体育の先生はもちろんサッカー好きのドイツ人やヨーロッパ人の神父さん等も、みんな応援して下さったそうであるし、今もその伝統を守る佃先生や市川先生も、もちろんのことである。

長くこの六甲サッカー部の歴史を見てこられた諸先輩方の中には、「最近のサッカー部は…」「だいたい今の若い奴等は…」と苦言を提したいと思



いの方もいらっしゃると思われる。

しかし、あえて諸先輩方に申し上げたい。どうぞご心配なく。

あの砂ぼこりのグラウンドでボールを追い、六甲サイダーでのどを癒した経験を持つ者は、すべて7期の先輩が、ヒルケルさんが、そしてそれを作り上げた諸先輩方が持っていたハートをちゃんと持っているのです。

サラリーマンとしてビジネスのフィールドを駆け巡っている先輩も、医者や教師として今でも陰ながらサッカーにたずさわる方も、そして劇団を主宰するO先輩、30すぎでもロックンロールに生きるH君、幅広い交遊関係のおかげで東京で就職できなくなったI君にも、そうは見えなくても、ちゃんと六甲のサッカースピリッツを大切に育んでいるのですと。

『サッカーの先輩・後輩は死ぬまでや』と……

会も開始からから1時間が過ぎ、一応の話も出尽くした頃、一人の先輩がポツリとこう言われた。

「せやけど、あれやな。サッカーの先輩・後輩いうのは死ぬまでやな」と。

いい言葉だと思った。

「六甲のサッカー部という同じ道場で育った者は、見えない糸でつながっているから本当に困ったらちゃんと言ってこいよ」

「サッカーってやっぱり一生付き合っていくもんやな」ってことだと思う。他の7期の先輩方も大きくなずいていた。

こんなすてきな言葉を残して、7人の侍は夜の神戸の街へと消えていったのである。まさか、みんなでカラオケボックスへサザンを唄いに行ったわけではないはずだが、何だかただのオッサン達が妙にステキに、そしてうらやましく見えた夜であった。

一追伸一

このインタビューから1年近く過ぎたある日、なんと、この創部のメンバーの中の谷田先輩と一緒にサッカーをすることになったのである。

“おいおい、マジかよ”と最初は笑いながら見ていたのですが、なかなかどうして立派なもの。

7期の侍はやっぱり、我等後輩の誇るべきイカス野郎であったのです。

